経序・経録類の再検討 その一

―道安時代の仏典訳出者について―

畝部俊英

目次

はじめに
一、問題の所在
二、経序・経録類の再検討
三、訳経史研究についての提案

はじめに

後漢から宋、元に至る約一千年の間に、中国において、印度西域から将来せられた仏典が漢文に訳出された翻訳に関する歴史的研究、所謂漢訳仏典の訳経史研究は、従来ほとんど経序、経録類を中心とする研究が大勢を占めてきた。

諸経録類の伝承する仏典名、訳出年、訳出場所、訳出関係者、訳出事情等についての、各経録類の間の同異の摘

示、経序、経記との対照による経録類の伝承の誤謬の訂正、現存仏典との比定の再検討など、我が国における近代の訳経史研究は、諸先学の努力によって、これまですぐれた業績を次々と生み出してきた。

所がこれらの研究は、すべて仏典に関する記録という外的資料に基づくものであって、仏典そのものの訳語訳文という内的または第一資料に基づくものではなかった。

かつて林屋友次郎博士は、「経録研究の順序及び方法」[1]を述べていられるなかで、「この訳語訳風の研究なるものは、訳経史研究の最後の決定をなすものであって、この研究が完成さるる迄は、本当の確実な訳経史上の結論は看出し難いと云ってよい。加之、この研究は前にも述べた如く時間と手数とを惜しまなければ、具体的な聖典の相互比較上になさるるものであるだけに、いつかは必ず完成し得なければならないものである。[2]」といわれ、「出来得れば、この研究は一二の特志者の研究に委ねないで、各方面の知識を持つ人の協力に依て研究されるやうな機関が発生されんことを実は切望に堪へないで居る。[3]」と心情を吐露していられるけれども、今日に至るまで、この博士の提案は取り上げられていない。

また境野黄洋博士は、「訳主は必ずしも支那語に通ぜず」と述べられ、求那跋陀羅を例に上げ、「例へば求那跋陀羅（Guṇabhadra）が『勝鬘経』を訳したといふが如き、求那跋陀羅の支那へ来たのは、宋の元嘉十二年であるが、『勝鬘経』の訳出は、其の翌年の元嘉十三年であるから、支那語には、未だ全く通じなかったのである。然し経の初めには、求那跋陀羅訳として名を署せられて居る。是れは訳主の名を巻頭に出したので支那語に訳した所謂伝語の人は、梵漢両語に通じた宝雲であったのである。斯ういふ例は、外にも珍らしくないことで、……[4]」と注意

していられるが、この博士の卓見も、訳主や伝語が実際にどんな役割りを果したかの確めが、具体的に一つ一つの仏典の訳語訳文などを通して行われず、単に記録の上から述べられたことであったので、残念ながら、訳経史研究には十分生かされず、他の人もこの考えを取り入れなかった。

所で現存『増壱阿含経』の訳出をめぐって、曇摩難提か、僧伽提婆かという経録から近代の諸学者にいたるまでの訳者問題について、筆者は『増壱阿含経』に八正道の各品を「等見・等治・等語・等業・等命・等方便・等念・等定」―これを仮りに「等見型の訳語」とよぶ―というように訳されているところと、「正見・正治・正語・正業・正命・正方便・正念・正定」―これを仮りに「正見型の訳語」とよぶ―というように訳されているところのあることに注目して、この『増壱阿含経』と同じ時代、即ち釈道安（三一二―三八五）が長安において訳経事業に専念した時代及びその前後に訳出せられた仏典の訳語を調査した結果、次のことが判明した。

「等見型の訳語」は、誦出者や筆受者は誰であれ、竺仏念が訳出に関係している仏典のみに見出されるものである。即ち、「等見型の訳語」は、仏典を実際に漢文に訳した訳出者である竺仏念のみに認められる独特の訳語であるということである。

従って、この事実より、現存の『増壱阿含経』について、次のようなことを推定した。

㈠　現存の『増壱阿含経』に、「等見型の訳語」が見出されることは、何等かの意味で、竺仏念が訳出に関係しているからであろう。従ってこの『増壱阿含経』には、所謂失われたといわれる曇摩難提誦出の増一阿含経の痕跡が認められる。

(二) しかるに、「正見型の訳語」が多く見られることは、誰かの改訳を経ていることを認めなくてはならない。この改訳者を僧伽提婆と推定することも勿論許されるが、積極的に僧伽提婆とする根拠は、『出三蔵記集』以後の他の経録が『中阿含経』についての記録にならって決めた記述以外にはない。

(三) 従って道安の「増一阿含序」及び僧祐の『出三蔵記集』の記述を重んじるならば、推定の域を出ない僧伽提婆訳とするよりも、「曇摩難提口誦胡本、竺仏念訳出」を取り、それに誰かが改訳を加えたとすることが妥当であろう。[8]

以上の如く訳語調査に基づいて、更に経序、経録類を再検討してみた結果、道安時代の訳経事業においては、後世の整備せられた訳場の観念でもって、訳経組織を見てはならないのではないか、特に印度西域から中国へやってきて、自分が暗記している仏典を誦出するか、印度西域から将来された仏典を読誦する役の誦出者と、印度西域の諸言語に通じ、仏典を実際に漢文に訳出する役の訳出者は、両者を兼ねた人以外、はっきり区別せられるべきもので、後世の訳主というような観念で、誦出者を訳者にして、本当の訳出者を問題にしないのでは、少くとも漢訳仏典の訳経史研究にはならないのではないかというような疑問が、筆者に生れた。

この疑問、問題意識に立って、更に経序と経録類を検討してみると、経序や『出三蔵記集』と、『出三蔵記集』以後の他の経録類とは誦出者と訳出者の扱いが確かに違う。以下この点について明らかにしたい。

漢訳仏典の訳経史研究においては、誰が誦出したかを明らかにすることも大切な事柄であるが、誰が漢文に訳出したかを明らかにすることは、それに劣らず重要な事柄である。

従来、一部の人たちのうちにおいて、漢訳仏典の訳経史研究には訳語訳文などの調査研究からは、労多くして功少なく、あまり成果は期待出来ないというような考えがあるようであるが、それは、これまでの観念でもって、誦出者を訳者として漢訳仏典を見ていく限り、そこに訳語訳文などの統一が見出せないのは当然であって、本当の訳出者さえ見つけ出されるならば、竺仏念に特有の「等見型の訳語」が見出される如く、訳出者が一人の人間である場合には、必ずそこにその人独特のくせや訳語訳文は存すると思われる。[7] 従って、この事は、訳出者の名前が不明であっても、同じくせや訳語訳文などが見出される仏典は、同じ訳出者と見なせる可能性も考えられる。

ともかく、訳語訳文などの調査研究と経序、経録類の再検討を通して、訳経史研究に新生面が開かれるにちがいない。

現存『増壱阿含経』の訳出について、訳語調査の結果と、道安の「序」及び僧祐の『出三蔵記集』の記述を通して、実際の訳出者、竺仏念の存在の重要なことに気づかされた筆者は、更に進んで、竺仏念特有の「等見型の訳語」の仏典を中心として、誦出者と訳出者の問題が、経序、経録類には、どう伝承され、どう扱われているかを再検討してみたい。

漢訳仏典の訳経史研究は、ここから新らたに出発しなければならないと信ずるからである。題して「経序・経録類の再検討—道安時代の仏典訳出者について—」とした所以も、ここに存する。

註（敬称はすべて略す）

① 林屋友次郎『経録研究　前篇』一六〇頁—二〇九頁。

② 林屋友次郎『経録研究　前篇』一七八頁。

③ 右同書一七九頁—一八〇頁。

④ 境野黄洋『支那仏教精史』三〇五頁。

⑤ 水野弘元「漢訳中阿含と増一阿含との訳出について」（『大倉山学院紀要』第二輯）六三頁及び前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』六六九頁参照。

⑥ 拙論「竺仏念の研究―漢訳『増壱阿含経』の訳出をめぐって―」（『名古屋大学文学部研究論集』LI、哲学一七）一〇頁―二九頁。

⑦ 拙論「東晋の訳経者僧伽提婆の研究」（『同朋大学論叢』第二四・二五合併号）二六二頁―二七三頁参照。

一、問題の所在

本稿においては、釈道安が長安に迎えられ、訳経事業に余生のすべてを尽くした時代（三七九―三八五）[1]―道安時代と仮りによぶ―に限定して、そこで、訳出せられた仏典について、誦出者と訳出者の問題を、経序及び歴代の経録類を通して、考えてみたい。

釈道安の訳経事業に限定した理由は、

(一) 釈道安に至って、中国において、初めて真に組織的、自覚的な訳経事業が始められたこと。

(二) 道安自から執筆した経序等の信頼し得る記録が『出三蔵記集』を通して残されていて、歴代の経録類の記述との対照が可能であること。

(三) 今のところ、厖大な漢訳仏典の全体を扱うことは、筆者の到底及ばぬところであることにもよるが、誦出者と訳出者の問題は、初期訳経史の問題であって、それには、道安時代が、抽出せられる一つのサンプルとして最も適切妥当なものであると判断せられること、による。

以上の理由によって、道安時代を取り上げてみるが、勿論、ここでの考え方を、すべての時代の訳経史に当てはめてみようとするものではなく、初期訳経史研究の一視点として発表し、諸先学の御指導を仰ぎたいとの願いからであることを、念のため申し添えておきたい。

さて記録によって知られるところによれば、釈道安は長安において少くとも約十四の経律論の訳出を一応完成させたようである。[2]

即ち、それらは、

(1) 比丘大戒　(欠)
(2) 尼受大戒法（授比丘尼大戒）　(欠)
(3) 二歳戒儀（受坐より嘱授諸雑事に至る）　(欠)
(4) 比丘尼大戒　(欠)
(5) 摩訶鉢羅若波羅蜜経抄
(6) 阿毘曇心論（阿毘曇抄）　(欠)
(7) 『四阿含暮抄解』（『大正蔵』二五巻）
(8) 『鼻奈耶』（『大正蔵』二四巻）
(9) 鞞婆沙論　(欠)
(10) 『阿毘曇八犍度論』（『大正蔵』二六巻）

(11)『尊婆須蜜菩薩所集論』（『大正蔵』二八巻）
(12)中阿含経（欠）
(13)『僧伽羅刹所集経』（『大正蔵』四巻）
(14)『増壱阿含経』（『大正蔵』二巻）

である。

以上の十四の仏典のうち、『大正蔵』に入蔵され、現存するとせられているものの訳者名について、今試みに、経序の記録と、『高麗蔵』の『大蔵目録』[3]及び『大正蔵』の『大蔵経目録』[4]に記載する訳者名とを対照してみよう。経序の記録と二つの『目録』の記載する訳者名を対照してみることによって、誦出者と訳出者の問題が、いかに我々の親しい『大蔵経』に表わされているかの一端を示してみようと思うからである。

(a)『四阿含暮抄解』

経序の記録	高麗蔵『大蔵目録』	大正蔵『大蔵経目録』
未詳作者（恐らく道安）「四阿含暮抄序」	四阿含暮抄二巻	四阿鋡暮抄解（二巻）
○鳩摩羅仏提執胡本。※本＝文㊀	符秦西域三蔵鳩摩羅仏提訳。[6]	符秦　鳩摩羅仏提等訳。[7]
○仏念・仏護為訳。		
○僧導・曇究・僧叡筆受。[5]		

(b)

『鼻奈耶』

釈道安「鼻奈耶序」
○耶※舎出。※㊀＝捨
○仏提梵書。
○仏念為訳。
○曇景筆受。⑧

鼻奈耶十巻
姚秦涼州沙門竺仏念訳。⑨

鼻奈耶（十巻）
姚秦　竺仏念訳。⑩

(c)

『阿毘曇八犍度論』

釈道安「阿毘曇序」
○僧迦禘婆出。
○仏念訳伝。
○慧力・僧茂筆受。
○法和、理其指帰。⑪

阿毘曇八揵度論三十巻
符秦罽賓三蔵僧伽提婆共仏念訳。⑫

阿毘曇八犍度論（三十巻）
符秦　僧伽提婆共竺仏念訳。⑬

(d)

『尊婆須蜜菩薩所集論』

未詳作者（恐らく道安）「婆須蜜集序」

○僧伽跋澄出。
○仏念訳伝。
○跋澄・難陀（恐らく難提）・※掃婆三人執胡本。※掃＝禅㊂
○慧嵩筆受。
○余（恐らく道安）与法和、対校修飾。
○武威、小多潤色⑭。

尊婆須密（ママ）菩薩所集論七巻

符秦罽賓三蔵僧伽跋澄等訳⑯。

尊婆須蜜菩薩所集論（十巻）

符秦　僧伽跋澄等訳⑯。

(e)

『僧伽羅刹所集経』

未詳作者（恐らく道安）「僧伽羅刹経序」

僧迦羅（ママ）刹所集経三巻

僧伽羅刹所集経（三巻）

○僧伽跋澄、齎此経本、出。
○仏念為訳。
○慧嵩筆受。
○余（恐らく道安）与法和、対検定之。[17]

符秦罽賓三蔵僧伽跋澄訳。[18]

符秦　僧伽跋澄等訳。[19]

(f)

『増壱阿含経』

釈道安「増一阿含序」
○曇摩難提出。
○仏念訳伝。
○曇嵩筆受。
○余（道安）与法和、共考正之。
○僧略※・僧茂、助挍漏失。[20]
※略＝貉 元 明

増一阿含経五十一巻
前秦建元年曇摩難提訳。[21]

増一阿含経（五十一巻）
東晋　瞿曇僧伽提婆訳。[22]

未詳作者「僧伽羅刹集経後記」

○曇摩難提口誦。

○仏念為訳人。[29]

釈道安のもとで訳出せられた約十四の仏典のうち、以上のごとく(a)から(f)にいたる六つの現存する仏典を取り出し、経序の記録と、『高麗蔵』の『大蔵目録』及び『大正蔵』の『大蔵経目録』の該当個処とを対照してみた。

先づ最初に注目すべきことは、上段の経序の記録を通観してみると、これら六つの仏典の誦出者や筆受者は、各仏典まちまちであるが、すべての仏典に竺仏念が訳出者として上げられている点である。

そして八正道の訳語が見出せない『鼻奈耶』以外の他の五つの仏典は、既に発表した拙論「竺仏念の研究」中の八正道訳語表[30]に見られる如く、すべて「等見型の訳語」で訳出されている。しかもそのうち『増壱阿含経』以外の他の四つの仏典には、「等見型の訳語」しか認められない。

この事実から、これらの六つの仏典の訳出者は竺仏念であって、断じて誦出者が訳出者ではないと思う。

所が次に、中段の『大蔵目録』と下段の『大蔵経目録』を見てみると、事情は一変している。

上段の経序の記録においては、誦出者と訳出者は、役割りの違いによって明確に区別せられており、両者はまったく同等の立場に置かれ、誦出者にいささかの優位性も認めていない。

これに対し、二つの『目録』では、(b)『鼻奈耶』の場合以外、(a)『四阿含暮抄解』の中段の「符秦西域三蔵鳩摩

羅仏提訳」の如く、誦出者（この場合には胡文の読誦者のようである）の名前が訳者として掲げられ、実際の訳出を担当した仏念と仏護はまったく無視され、名前さえ出されていない。その下段を見てみると「符秦　鳩摩羅仏提等訳」と「等」の中に他の訳出に協力した者のあることを含めて表わしているようであるが、考え方の基本は中段とまったく同じである。これらの例は、(b)『尊婆須蜜菩薩所集論』の中段と下段、(e)『僧伽羅刹所集経』の中段と下段、(f)『増壱阿含経』の中段にも見られる如く、『目録』の根本的な考え方を表わしているようである。

また(c)『阿毘曇八犍度論』の中段と下段の如く、「符秦罰賓三蔵僧伽提婆共仏念訳」、「符秦　僧伽提婆共竺仏念訳」と実際の訳出者は、名前は上げられていても、誦出者の協力者、或いはせいぜい共訳者の位置に置かれている。

上段の経序などを読んでみると、道安時代の西域三蔵たちは、印度西域地方より身命を賭して長い困難な砂漠を越えて、中国へ到着し、大低、長安に迎えられる。彼等は、ほとんどの場合、後世のように仏典の原本を運んでくるのではなく、仏典は暗誦によって身につけているのであって、請いに応じて誦出するのである。暗記であるから時には忘失してしまって誦出できない箇処があったり、また暗誦には限度というものがあるのであろうか、各誦出者とも、あまり多くの仏典を誦出していない。

大低の場合、仏典誦出者は長安に来詣すると、直ちに請いに応じて誦出をはじめ、ここに仏典訳出の事業が始まる。従って誦出者は片言の中国語ぐらいは長い道中のうちに習得することができたかもしれないが、恐らく仏典を自ら漢文に訳出するだけの能力はない。能力はなくても、誦出者は仏典をただ誦出すればよかった。当時、長安に

は、誦出者の通訳の役を兼ねた、漢文に仏典を訳出する専門の訳出者がいたからである。[35] 竺仏念はそのような訳出者のうちでも、代表的な一人であった。

従って、先に紹介した境野博士の言を引くまでもなく、漢文に訳出する能力のほとんどない印度西域の三蔵を訳者とするということは、訳経の功を誦出者に帰するということかもしれないが、実は奇妙なことといわねばならない。

しかし、この奇妙なことが、従来の訳経史では、訳者として通用し、現今の学界においても、依然として改められていない。

釈道安のいくつか残されている経序並びに現存最古の経録である僧祐の『出三蔵記集』では、誰が誦出し、誰が訳出したかを明記して、このような混乱はない。

所が我々の最も親しい、上に取り上げた二つの『目録』にまで、このように誦出者が訳者とされ、本当の訳出者は消えてしまっているのは、何によるのであろうか。

かかる点について、次に歴代の経録類の扱い方を年代順に検討してみよう。

註

① 拙論「東晋の訳経者僧伽提婆の研究」二三五頁参照。

② 右拙論二三五頁―二四七頁参照。

③ 『昭和法宝総目録』二巻九三頁―一一八頁所収。以下、〔略号〕『昭和総目録』。

④ 『大正新脩大蔵経目録』改訂新版（大正新脩大蔵経刊行会編纂、昭和四十四年九月二十五日再刊発行）による。以下、〔略号〕『大正蔵目録』。

⑤『大正蔵』五五巻六四頁下。
⑥『昭和総目録』二巻一〇九頁下。
⑦『大正蔵目録』一五九頁。
⑧『大正蔵』二四巻八五一頁上。
⑨『昭和総目録』二巻一〇八頁上。
⑩『大正蔵目録』一五五頁。
⑪『大正蔵』五五巻七二頁上。
⑫『昭和総目録』二巻一〇八頁上。
⑬『大正蔵目録』一六三頁。
⑭『大正蔵』五五巻七一頁下―七二頁上。
⑮『昭和総目録』二巻一〇八頁下。
⑯『大正蔵目録』一六四頁。
⑰『大正蔵』五五巻七一頁中。
⑱『昭和総目録』二巻一〇九頁上。
⑲『大正蔵目録』二一頁。
⑳『大正蔵』五五巻六四頁中。
㉑『大正蔵』五五巻七一頁中―下。
㉒『昭和総目録』二巻一〇三頁下。
㉓『大正蔵目録』一三頁。なおここで「僧伽提婆訳」となっていることについては、拙論「竺仏念の研究」三頁―四頁、二八頁、拙論「僧伽提婆の研究」二四六頁参照。
㉔拙論「竺仏念の研究」二六頁―二七頁。
㉕釈道安「鞞婆沙序」（『大正蔵』五五巻七三頁下）、釈道安「阿毘曇序」（『大正蔵』五五巻七二頁中）参照。
㉖拙論「竺仏念の研究」三八頁。

二、経序・経録類の再検討

ここでも釈道安によって行われた訳経事業で訳出せられた約十四の仏典のうち、『大正蔵』に入蔵せられ、現存するとせられているもの、即ち前章で扱った(a)から(f)にいたる六つの仏典に限定して、やはり前章で扱った経序の記録と、経録類の該当個処の記事とを対照してみよう。

経録類としては、

(一) 僧祐撰『出三蔵記集』十五巻（『大正蔵』五五巻）、梁武帝天監年間（五〇二―五一五）、〔略号〕『出三』。

(二) 法経等撰『衆経目録』七巻（『大正蔵』五五巻）、隋文帝開皇十四年（五九四）、〔略号〕『法』。
(三) 費長房撰『歴代三宝紀』十五巻（『大正蔵』四九巻）、隋文帝開皇十七年（五九七）、〔略号〕『三』。
(四) 彦琮等撰『衆経目録』五巻（『大正蔵』五五巻）、隋文帝仁寿二年（六〇二）、〔略号〕『彦』。
(五) 道宣撰『大唐内典録』十巻（『大正蔵』五五巻）、唐高宗麟徳元年（六六四）、〔略号〕『内』。
(六) 静泰撰『大唐大敬愛寺一切経論目』五巻（『大正蔵』五五巻）、唐高宗麟徳三年（六六六）、〔略号〕『静』。
(七) 靖邁撰『古今訳経図紀』四巻（『大正蔵』五五巻）、唐高宗麟徳頃（六六四―六六六）、〔略号〕『図』。
(八) 明佺等撰『大周刊定衆経目録』十五巻（『大正蔵』五五巻）、周則天武后天冊万歳元年（六九五）、〔略号〕『武』。
(九) 智昇撰『開元釈教録』二十巻（『大正蔵』五五巻）、唐玄宗開元十八年（七三〇）、〔略号〕『開』。
(十) 円照撰『貞元新定釈教目録』三十巻（『大正蔵』五五巻）、唐徳宗貞元十六年（八〇〇）、〔略号〕『貞』。

を一応取り上げてみる。これらの経録類によって、(a)から(f)にいたる六つの仏典がいかに伝承されてきたかの概観がほぼ可能であろうと思う。

(a) 『四阿含暮抄解』（以下の傍線は筆者が付す。）

未詳作者（恐らく道安）「四阿含暮抄序」

余以壬午之歳（三八二）八月、東省先師寺廟。於鄴寺、令鳩摩羅仏提執胡本※、仏念・仏護為訳、僧導・曇

究・僧叡筆受、至冬十一月乃訖。此歳夏出阿毘曇、冬出此経。一年之中、具二蔵也。①※本＝文㊂

(一)『出三』巻二（祐所新撰）

四阿含暮抄経二巻

右一部。凡二巻。晋孝武※時、西域沙門鳩摩羅仏提、於鄴寺出。仏提執胡本、竺仏念・仏護為訳、僧導・僧叡筆受。②※武十（帝）㊂

(二)『法』巻六

四阿含暮抄二巻 前秦世、鳩摩羅仏提共竺仏念等訳③

(三)『三』巻八

四阿含暮抄経二巻 建元十四年出

右一経二巻。晋孝武帝世、西域三蔵沙門鳩摩羅仏提、秦言童覚、於鄴寺訳。仏提執梵本、竺仏念・仏護等訳為秦文、沙門僧導・曇究・僧叡等筆受。④

(四)『彦』巻五（闕本 旧録有目而無経本）

四阿含暮抄二巻 姚秦世、鳩摩羅仏提訳。⑤

(五)『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）

四阿含暮抄経 建元十四年出之

右一経二巻。晋孝武世、西域三蔵沙門鳩摩羅仏提、秦言童覚、於鄴寺訳。仏提執梵本、竺仏念・仏護等訳

為秦文、沙門僧導・曇究・僧叡等筆受。⑧

『内』巻七（歴代小乗蔵経翻本単重伝訳有無録）

四阿含暮鈔（ママ）※四十二紙、或二巻　※四＝二㊀

前秦鳩摩羅仏提訳。⑦

『内』巻八（歴代衆経見入蔵録）

四阿含暮鈔二巻⑧

『内』巻九（歴代衆経挙要転読録）

四阿含暮鈔※四十二紙、或二巻　※四＝三㊀

前秦鳩摩羅仏提訳。⑨

(六)『静』巻二（賢聖集伝賢聖所撰翻訳有源）

四阿含慕（ママ）抄二巻四十二紙、闕本訪得　前秦世、鳩磨（ママ）羅仏提訳。⑩

(七)『図』巻三

沙門鳩摩羅仏提、此言童覚、西域人。以符秦建元五年至七年歳次乙亥、共竺仏念・仏護等、於長安鄴寺、訳四阿含暮抄経一部二巻、沙門僧導・曇究・僧叡等筆受。⑪

(八)『武』巻十四（見定流行入蔵録）

四阿含暮抄一部二巻。⑫

(九)　『開』巻三（総括群経録）

四阿含暮抄解二巻亦云四阿含暮抄経、見僧祐録

右一部二巻其本見在。

沙門鳩摩羅仏提、秦言童覚、西域人。以符堅建元十八年壬午八月、於鄴寺、訳阿含暮抄一部、冬十一月乃訖。仏提執梵本、仏念・仏護訳為秦文、沙門僧導・僧叡・曇究筆受。[13]

『開』巻十三（有訳有本録）

四阿含暮抄解二巻阿羅漢婆索跋陀撰

符秦西域沙門鳩摩羅什（ママ）仏提等訳。拾遺編入、単本[14]

『開』巻十七（別録中補闕拾遺録）

四阿含暮抄解二巻　符秦三蔵鳩摩羅仏提訳。[15]

『開』巻二十（重出）（入蔵録）

四阿含暮抄解二巻亦云四阿含暮抄経、四十六紙　符秦鳩摩羅仏提等訳。[16]

(十)　『貞』巻五（総集群経録）

四阿含暮抄解二巻亦四阿含暮抄経、安公製序、見僧祐録

右一部二巻其本見在。

沙門鳩摩羅仏提、秦言童覚、西域人。以苻堅建元十八年壬午八月、於鄴寺、訳阿含暮抄一部、冬十一月乃訖。

仏提執梵本、仏念・仏護訳為秦文、沙門僧道（ママ）・僧叡・曇究筆受。[17]

『貞』巻二十三（有訳有本録）

四阿含暮抄解二巻　阿羅漢婆素跋陀撰

符秦西域沙門鳩摩羅仏提等訳。拾遺編入単本。[18]

『貞』巻二十七（別録補闕拾遺録）

四阿含暮（ママ）鈔解二巻

符秦三蔵鳩摩羅仏提訳。……拾遺編入。[19]

『貞』巻三十（小乗入蔵録）

四阿含暮抄解二巻（亦云四阿含暮抄経（ママ））　四十六紙[20]

(b)

『鼻奈耶』

釈道安「鼻奈耶序」

又其伴爵賓鼻奈、厥名耶舎、※諷鼻奈経甚利、即令出之。仏提梵書、仏念為訳、曇景筆受。自正月十二日出、至三月二十五日乃了。凡為四巻。[21]　※舎＝捨(脚)

(一)　『出三』

〔記載せず〕

(二)　『法』巻五

鼻奈耶十巻（前秦世、竺仏念訳）㉜

(三)　『三』巻八

鼻奈耶（ママ）経一十巻（或云戒因縁経、沙門曇景筆受、見釈道安経序）

、、、、

右、、、、涼州沙門竺仏念、㉝、、、、

(四)　『彦』巻一（単本原来一本更無別翻）

鼻奈耶十巻　前秦世、竺仏念訳。㉞

(五)　『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）

鼻奈耶律一十巻（或云戒因縁経、沙門曇景筆受、見釈道安経序）

、、、、

右、、、、涼州沙門竺仏念、㉟、、、、

『内』巻七（小乗律本并訳有無録）

鼻奈耶十巻

前秦竺仏念・道安等、於長安訳。㊱

『内』巻八（歴代衆経見入蔵録）

鼻奈耶十巻、一帙㊲

『内』巻九（歴代衆経挙要転読録）

鼻奈耶十巻、一百五十五紙

前秦竺仏念共道安等、於長安訳。[28]

(六)『静』巻一（単本源来一本更無別翻）

鼻奈耶十巻一百五十五紙 前秦世、竺仏念訳。[29]

(七)『図』巻三

沙門竺仏念、、、、、

、、、、、

鼻奈耶経十巻。[30]

(八)『武』巻十（小乗律小乗論賢聖集伝）

鼻奈耶律一部十巻一名戒因縁経

右後秦竺仏念等、於長安訳。出長房録。[31]

『武』巻十四（見定流行入蔵録）

鼻奈耶律一部十巻一名戒因縁経[32]

(九)『開』巻四（総括群経録）

鼻奈耶律十巻一名誡（ママ）因縁経、亦云鼻奈耶経、亦云戒果因縁経、沙門曇景筆受、見安公経序、符秦建元十四年壬午正月十二日出

、、、、

沙門竺仏念、、、、、、[33]

『開』巻十三（有訳有本録）

鼻奈耶律十巻一帙、一名戒因縁経

姚秦涼州沙門竺仏念、於符秦代訳単本。[34]

『開』巻二十（重出）（入蔵録）

鼻奈耶律十巻一名誡因縁経、亦戒果因縁経、亦云鼻奈耶経、一帙、一百五十五紙

姚秦竺仏念訳。[35]

(十)　『貞』巻六（総集群経録）

鼻那（ママ）耶律十巻一名試（ママ）因縁経、亦云鼻那耶経、亦云戒果困縁経、沙門曇景筆受、仏念伝訳、見安公経序、符秦建元十四年壬午正月十二日出

、、、、、、

沙門竺仏念、[36]、、、、、、

『貞』巻二十三（有訳有本録）

鼻奈耶律十巻一名戒因縁経、一帙

姚秦涼州沙門竺仏念、於符代訳、[37]単本。

『貞』巻三十（小乗入蔵録）

鼻奈耶律十巻　一帙一名誡因縁経、亦名戒果因縁経、亦云鼻奈耶経　一百五十五紙[35]

(c)　『阿毘曇八犍度論』

釈道安「阿毘曇序」

以建元十九年（三八三）罽賓沙門僧迦禘婆誦此経甚利、来詣長安。比丘釈法和、請令出之。仏念訳伝。慧力・僧茂筆受。和理其指帰。自四月二十日出、至十月二十三日乃訖。

其人検挍、訳人頗雑義辞。竜蛇同淵、金鍮共肆者、彬彬如也。和撫然恨之。余亦深謂不可。遂令更出、夙夜匪懈。四十六日、而得尽定。損可損者、四巻焉[36]。

(一)　『出三』巻二（祐所新撰）

阿毘曇八揵度二十巻一名迦旃延阿毘曇、建元十九年出

、、、、、、

右、、、、、、罽賓沙門僧伽提婆所訳出。[37]

(二)　『法』巻五（小乗阿毘曇蔵録）

阿毘曇論三十巻　一名迦旃延阿毘曇、一名八揵度、或二十巻、前秦建元年、沙門僧伽提婆、於洛陽訳　※[41]　※〔於洛陽〕―[42]

(三) 『三』巻八

阿毘曇八犍度三十巻 建元十九年出、亦名迦旃延阿毘曇、竺仏念伝語、※沙門慧力・僧茂等筆受、仏滅後三百余年、迦旃延阿羅漢造、或二十巻 ※〔語〕―㊂宮

、、、、、、

右、、、、、、罽賓三蔵法師僧伽提婆、(42)、、、、、、

(四) 『彦』巻一（小乗論単本）

阿毘曇論三十巻 或二十巻、一名迦旃延阿毘曇、名八犍度 前秦建元年、僧伽提婆共竺仏念訳。(43)

(五) 『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）

阿毘曇八犍度三十巻 建元十九年出、亦名迦旃延阿毘曇、※(一)仏念伝、沙門慧力・僧茂等筆受、仏滅後三百余年、※(二)迦旃延阿羅漢造、或二十巻 ※(一)(竺)十仏㊂ ※(二)造―㊀

、、、、、、

右、、、、、、罽賓三蔵法師僧伽提婆、(44)、、、、、、

『内』巻七（小乗論単重本 并訳有無録）

阿毘曇八犍度 三十巻、四百五十紙 (45)

『内』巻八（歴代衆経見入蔵録）

阿毘曇八犍度論 三十巻、三帙 (46)

(六)　『静』巻二（小乗論重翻訳）

阿毘曇八揵度論三十巻四百五十紙[47]

(七)　『図』巻二

沙門瞿曇僧伽提婆、此言衆天、罽賓国人。、、、、、初於符秦帝固※建元十九年、歳次丁亥、訳阿毘曇八揵度一部三十巻。[48]、、、、、　※固＝国㊀

(八)　『武』巻十（小乗律小乗論賢聖集伝）

阿毘曇八犍度一部三十巻或二十巻、一名迦旃延阿毘曇八犍度、四百五十紙

右前秦建元年、沙門僧伽提婆共竺仏念訳。出長房録。[49]

『武』巻十四（見定流行入蔵録）

阿毘曇八揵度一部三十巻　或二十巻、一名迦旃延阿毘曇八揵度[50]

(九)　『開』巻三（総括群経録）

阿毘曇八揵度論三十巻或無論字、或二十巻、或云迦旃延阿毘曇、或云阿毘曇経八揵度、初出、与唐発智論同本、建元十九年四月二十日出、至十月二十日訖、見僧祐録

、、、、、

右、、、、、、前一部三十巻見在

沙門僧伽提婆、、、、、、

以符堅建元十九年癸未、遊於長安、沙門法和請令翻訳。起十九年、訖建元末。出八揵度等論二部。[51]、、、、

『開』巻十三（有訳有本録）

阿毘曇八揵度論三十巻（迦旃延子造、或※二十巻、三帙）　符秦罽賓三蔵僧伽提婆共竺仏念訳（第一訳。）[52]

※十一(三)

『開』巻二十（重出）（入蔵録）

阿毘曇八犍度論三十巻（或無論字、或云迦旃延阿毘曇、或云阿毘曇経八健度、或二十巻、三帙、四百六十二紙）

符秦僧伽提婆共竺仏念訳。[53]

(十)　『貞』巻五（総集群経録）

阿毘曇八揵度論三十巻（或無論字、或二十巻、或云迦旃延阿毘曇、或云阿毘曇経八揵度、初出、与害訳（ママ）発智論同本、建元十九年四月二十日出、至十月二十三日訖、見僧祐録）

、、、、、

沙門僧伽提婆、、、、、、出八揵度等論二部。[54]

『貞』巻二十三（有訳有本録）

阿毘曇八揵度論三十巻（迦旃延子造、或二十巻）、三帙

符秦罽賓三蔵僧伽提婆共竺仏念訳。第一訳。[55]

『貞』巻三十（小乗入蔵録）

阿毘曇八揵度論三十巻　三帙（或無論字、或云迦旃阿毘曇経、或云阿毘曇八揵度、或二十巻）　四百六十二紙[56]

(d)　『尊婆須蜜菩薩所集論』

未詳作者（恐らく道安）「婆須蜜集序」

罽賓沙門僧伽跋澄、以秦建元二十年（三八四）、伝※(一)此経一部、来詣長安。武威太守趙政文業者学不厭士也、求令出之。仏念訳伝。跋澄・難陀（恐らく難提）・掃※(二)婆三人執胡本。慧嵩筆受。以三月五日出、至七月十三日乃訖。胡本十二千首廬也。余与法和、対挍修飾。武威少多潤色。[57]

※(一)伝＝転㊀　※(二)掃＝禍㊁

(一)　『出三』巻二（祐所新撰）

婆須蜜※集十巻建元二十年三月十五日出、至七月十三日訖

※〔集〕＝㊀

、、、、、、

右、、、、、、晋孝武帝時、罽賓沙門僧伽跋澄。、、、、、又齎婆須蜜胡本。竺仏念訳出。[58]

(二)　『法』巻五

婆須蜜所集論十巻前秦建元年沙門僧伽跋澄共竺仏念訳[59]

(三)　『三』巻八

婆須蜜経十巻建元二十年出、或云是集論

、、、、、、

右、、、、、、晋孝武帝世、罽賓三蔵法師僧伽跋澄。[60]、、、、、、

(四)　『彦』巻一（小乗論単本）

婆須蜜所集論十巻　前秦建元年、僧伽跋澄共竺仏念訳。[81]

(五)　『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）

婆須蜜経十巻建元二十年出、或云是集論

、、、、、

右、、、、、晋孝武帝世、罽賓三蔵法師僧伽跋澄。[82]、、、、、

『内』巻七（小乗論単重本幷有無録）

尊婆須蜜所集論一十巻、二百七十五紙

前秦建元年、僧伽跋澄共竺仏念訳。[83]※〔竺〕―㊞

『内』巻八（歴代衆経見入蔵録）

尊婆須蜜所集論一十巻、[84]一帙

『内』巻九（歴代衆経挙要転読録）

尊婆須蜜集論十巻、二百七十五紙

前秦建元年、僧伽跋澄共竺仏念訳。[85]※〔竺〕―㊞

(六)『静』巻一（小乗論単本）

尊婆須蜜所集論十巻二百七十五紙　前秦建元年、僧伽跋澄共仏念訳。[66]

(七)『図』巻三

沙門僧伽跋澄、〃〃〃〃

〃〃〃〃〃

尊者（ママ）婆須蜜所集論一部十巻。[67]　〃〃〃〃〃

(八)『武』巻十（小乗律小乗論賢聖集伝）

尊婆須蜜所集論一部十二巻或十巻、三百七紙

右前秦建十九年、僧伽跋澄共竺※仏念訳。出長房録。[68]　※〔竺〕―[高]

『武』巻十四（見定流行入蔵録）

尊婆須蜜所集論一部十二巻或十巻[69]

(九)『開』巻三（総括群経録）

尊婆須蜜菩薩所集論十巻或云婆須蜜経、或十二巻、或十四巻、建元二十年三月五日出、至七月十三日訖、跋澄・難提・提婆三人執本、仏念訳伝、慧常筆受、見僧祐録

〃〃〃〃〃

右〃〃〃〃〃其本竝在。

沙門僧伽跋澄、、、、、、。澄以建元十七年辛巳、至二十一年乙酉、共名徳法師釈道安等、訳婆須蜜等三部。涼州沙門竺仏念、外国沙門仏図羅刹伝語。[70]、、、、、

『開』巻十三（有訳有本録）

尊婆須蜜菩薩所集論十巻尊者婆須蜜造、或十四巻、或十二巻※

符秦罽賓三蔵僧伽跋澄等訳単本。[71]　※十四巻、或十二巻＝十三巻、或十四巻㊀

『開』巻二十（重出）（入蔵録）

尊婆須蜜菩薩所集論十巻或十二巻、或十四巻、亦云婆須蜜経、三百六十二紙

符秦僧伽跋澄等訳。[72]

(十)

『貞』巻五（総集群経録）

尊婆須蜜菩薩所集論十巻或云婆須蜜経、或十二巻、或十四巻、建元二十年三月五日出、至七月十三日訖、跋澄・難提・提婆三人執本、仏念伝訳、慧嵩筆受、安公製序、見僧祐録

、、、、、

右、、、、、其本並在。沙門僧伽跋澄、、、、、、。澄以建元十七年辛巳、至二十一年乙酉、共名徳法師釈道安等、訳婆須蜜等二部。涼州沙門竺仏念、外国沙門仏図羅刹伝語。[73]、、、、、

『貞』巻二十三（有訳有本録）

尊婆須蜜菩薩所集論十巻尊者婆須蜜造、或十四巻、或十二巻

符秦罽賓三蔵僧伽跋澄等訳単本[74]。

『貞』巻三十（小乗入蔵録）

※尊婆須蜜菩薩所集論十巻（或十二巻、或十四巻、亦云婆須蜜経）

三百六十二紙⑮　※尊十（者）⑭

(e)『僧伽羅刹所集経』

未詳作者（恐らく道安）「僧伽羅刹経序」

以建元二十年（三八四）、罽賓沙門僧伽跋澄、齎此経本、来詣長安。武威太守趙文業、請令出焉。仏念為訳。慧嵩筆受。正値慕容作難於近郊、然訳出不襄。余与法和、対検定之。十一月三十日乃了也。⑯

(一)『出三』巻二（祐所新撰）

僧伽羅刹集経三巻（秦建元二十年十一月三十日出）

右、、、、、晋孝武帝時、罽賓沙門僧伽跋澄、以符堅時、入長安、、、、、。竺仏念訳出。⑰

(二)『法』巻六

僧伽羅刹集三巻（前秦世、沙門曇摩難提訳）⑱

(三)『三』巻八

僧伽羅刹集経三巻（建元二十年十一月三十日出）

右、、、、、晋孝武帝世、罽賓三蔵法師僧伽跋澄、、、、、、⑲

『三』巻八

僧伽羅刹集二巻（仏滅後七百年、僧伽羅刹造、見宝唱録）

右、〃〃〃晋孝武帝世、兜佉勒国三蔵法師曇摩難提、〃〃〃〃〃㊿

(四)　『彦』巻二（重翻）（賢聖集伝（賢聖所撰翻訳有原））

僧伽羅刹集三巻、前秦世、沙門曇摩難提訳。(51)

(五)　『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）

僧伽羅刹集経三巻（建元二十年十一月三十日出）

右、〃〃〃〃晋孝武帝世、罽賓三蔵法師僧伽跋澄、〃〃〃〃〃(52)

『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）

僧伽羅刹集二巻（※仏滅後七百年、僧伽羅刹造、見唱録）　※〔滅〕―㊞

右、〃〃〃〃晋孝武帝世、兜佉勒国三蔵法師曇摩難提、〃〃〃〃〃(53)

『内』巻七（歴代小乗蔵経翻本単重伝訳有無録）

僧伽羅刹集（三巻、八十四紙）

前秦沙門曇摩難提訳。(54)

『内』巻八（歴代衆経見入蔵録）

僧伽羅刹所集経三巻 ㊺

『内』巻九（歴代衆経挙要転読録）

僧伽羅刹集三巻、八十四紙 前秦曇摩難提訳。㊻

(六) 『静』巻二（賢聖集伝賢聖所撰翻訳有源）

僧伽羅刹集三巻八十四紙 前秦世、沙門曇摩難提訳。㊼

(七) 『図』巻三

沙門僧伽跋澄、〃〃〃〃〃

僧伽羅刹集経 三巻。㊽ 〃〃〃〃〃

『図』巻三

沙門曇摩難提、〃〃〃〃〃

僧伽羅刹集経 三巻。㊾

(八) 『武』巻七（小乗単訳経目）

僧伽羅刹集経一部三巻

右前秦建元二十年、僧伽跋澄訳。出長房録。[90]

『武』巻十（小乗律小乗論賢聖集伝）

僧伽羅刹集一部三巻或二巻、或五巻九十九紙

右前秦代、沙門曇摩難提訳。出長房録。[91]

『武』巻十四（見定流行入蔵録）

僧伽羅刹集経一部三巻[92]

(九) 『開』巻三（総括群経録）

僧伽羅刹所集経三巻或云僧伽羅刹集初出、或五巻、建元二十年出、十一月三十日訖、仏念伝訳、慧嵩筆受、見僧祐録、於長安石羊寺出、亦云仏護伝訳

右、、、、、、其本並在。

沙門僧伽跋澄、、、、、、[93]

『開』巻三（総括群経録）

僧伽羅刹集二巻仏去世後七百年、僧伽羅刹造、初出、見宝唱録

右、、、、、、闕本、、、、、

沙門曇摩難提、、、、、、[94]

『開』巻十三（有訳有本録）

僧伽羅刹所集経三巻（僧伽羅刹撰、或五巻）

符秦罽賓三蔵僧伽跋澄等訳（第一訳、両訳一闕）[95]

『開』巻十五（欠本目録）

僧伽羅刹集二巻　符秦天竺三蔵曇摩難提訳（第三訳）[96]

『開』巻二十（重出）（小乗入蔵録）

僧伽羅刹所集経三巻（或云僧伽羅刹集、或五巻、八十五紙）　符秦僧伽跋澄等訳[97]

(十)『貞』巻五（総集群経録）

僧伽羅刹所集経三巻（或云僧伽羅刹集、初出、或五巻、建元二十年出、十一月二十日訖、仏念伝訳、慧嵩筆受、安公製序、見僧祐録、於長安石羊寺出、亦云仏護伝訳）

右、、、、、、其本並在。沙門僧伽跋澄、、、、、[98]

『貞』巻五（総集群経録）

僧伽羅刹集二巻（仏去世後七百年、僧伽羅刹造、初出、見宝唱録）

右、、、、、、闕、、、、、、

沙門曇摩難提[99]、、、、、、

『貞』巻二十三（有訳有本録）

僧伽羅刹所集経三巻（僧伽羅刹撰、或五巻）

符秦代訳 ⑩

『貞』巻二十五（別録中有訳無本録）

僧伽羅刹集二巻

符秦天竺三蔵曇摩難提訳（第二訳）

右前後両訳一存一闕。 ⑪

『貞』巻三十（小乗入蔵録）

僧伽羅刹所集経三巻（或云僧伽羅刹集、或五巻）八十五紙 ⑫

(f) 『増壱阿含経』

釈道安「増一阿含序」

有外国沙門曇摩難提者、兜佉勒国人也。齠齔出家、孰与広聞誦。二阿含温故日新。周行諸国、無土不渉。以秦建元二十年、来詣長安。外国郷人、咸皆善之。武威太守趙文業、求令出焉。仏念訳伝。曇嵩筆受。歳在甲申夏出、至来年春乃訖。為四十一巻。分為上下部、上部二十六巻、全無遺忘。下部十五巻、失其録偈也。余

与法和、共考正之。僧略※・僧茂、助挍漏失。四十日乃了。㊃※略＝碧元㊀

未詳作者「僧伽羅刹集経後記」

且婆須蜜経及曇摩難提口誦増一阿含并幻網経、使仏念為訳人。㊃

(一)　『出三』巻二（祐所新撰）

増一阿含経三十三巻　秦建元二十年夏出※(一)、二十一年春訖、定三十三巻、或分為三十四※(二)巻

※(一)出十（至）㊂　※(二)三十四巻＝二十四分㊀

右、、、、晋孝武時、兜佉勒国沙門曇摩難提、以符堅時、入長安。難提口誦胡本。竺仏念訳出。㊃

(二)　『法』巻三

増一阿含経五十巻　前秦建元年、沙門曇摩難提訳㊀

(三)　『三』巻八

増一阿含経五十巻　建元二十年四月一日、為秦武威太守趙文業出、是第一※訳、沙門慧嵩・竺仏念等筆受、見僧叡二秦録、僧祐及宝唱録並載

※〔録〕―㊀。

右、、、、、晋孝武帝世、兜佉勒国三蔵法師曇摩難提、、、、、㊀

(四)　『彦』巻一（単本原来一本更無別翻）

増壱阿含経五十一巻　前秦建元年、曇摩難提訳。㊃

(五)　『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）

増一阿含経五十巻（建元二十年四月一日、為秦武威太守趙業出、第一訳、慧嵩・仏念筆受、見僧叡二秦録、祐・唱録並載）

右、、、、、晋孝武帝世、兜佉勒国三蔵法師曇摩難提、秦言法喜、以建元初、至長安、誦四阿含、梵本口授、竺仏念写為梵文。、、、、、⑯

『内』巻七（小乗単重翻幷訳有無録）

増一阿含経（五十一巻※、七百九十五紙）　※〔一〕―㉑

東晋前秦建元年、曇摩難提、於長安訳。⑰

『内』巻八（歴代衆経見入蔵録）

増一阿含経（五十一巻、五帙）⑱

『内』巻九（歴代衆経挙要転読録）

増一阿含経（五十一巻※、七百九十五紙）　※〔一〕―㉑

東晋前秦建元年、曇摩難提、於長安訳。

右一経、前後別訳、一十七部、文義無爽、故略不出。⑲

(六)　『静』巻一（単本（源来一本更無別翻））

増一阿含経五十巻（七百九十五紙）　前秦建元年、曇摩難提訳。⑳

(七)　『図』巻三

沙門曇摩難提、、、、、、研諷経典、以専精致業、遍観三蔵、暗誦阿含、、、、、、以建元二十年、歳次戊子、堅遣道安、集義学僧、請難提訳中阿含経五十九巻・増壱阿含経五十一巻、、、、、、、沙門竺仏念度語、慧嵩筆受。(一九)

(八)　『武』巻八（小乗重訳経目）

増一阿含経一部五十巻内典云或五十一巻、初訳、長房入蔵録云四十二経、九百三十九紙

右前秦建元二十年、曇摩難提、長安訳。出長房録。(一〇)

『武』巻十四（見定流行入蔵録）

増一阿含経一部五十巻内典或五十一巻、長房入蔵録四十二巻経(一一)

(九)　『開』巻三（総括群経録）

増壱阿含経五十巻第一訳、建元二十年、甲申夏出、至来春訖、為四十一巻、仏念伝訳、曇嵩筆受、見安公経序、僧叡・僧祐・宝唱録並載、祐云三十三及二十四巻、恐誤※

※〔一〕―(一二)

沙門曇摩難提、、、、、、研諷経典、以専精致業、遍観三蔵、闇誦中・増二阿含。、、、、、堅侍臣武威太守趙政、志深法蔵、乃与安公共請出経。政於長安城内、集義学僧、写出二含梵本、方始翻訳。仏念伝語。慧嵩筆受。提以符堅建元二十年甲申、至姚萇建初六年辛卯、訳中含等経五部。(一三)　、、、、、

『開』巻十五（別録中有訳無本録・小乗経重訳闕本）

増壱阿含経五十巻 房云四十一巻、※(一)祐云三十巻、※(二)或為二十四巻 ※(一)〔一〕―㊱ ※(二)〔或為二十四巻〕―㊲

符秦天竺三蔵曇摩難提訳第一訳。

右一経、前後両訳。一本在蔵、一本闕。㊳

(十) 『貞』巻五（総集群経録）

増壱阿含経五十巻第一訳、建元二十年、甲申夏出、至来春訖、為四十一巻、仏念伝訳、曇嵩筆受、見安公経序、僧叡・僧祐・宝唱録並載、祐云三十三及二十四巻、恐誤

右、、、、、、闕、、、、、

沙門曇摩難提、、、、、、研諷経典、以専精致業、遍観三蔵、闇誦中・増一阿含。、、、、、、

提以符堅建元二十年甲申、至姚萇建初六年辛卯、訳中阿含等経五部。㊴ 、、、、、

『貞』巻二十五（別録中有訳無本録・小乗経重訳闕本）

増壱阿含経五十巻

序云四十一巻、或云二十四巻、祐云三十三巻。

符秦天竺三蔵曇摩難提訳。 第一訳。㊵

以上の記事のうち、ここでの必要事項だけを整理して、表にしてみると、次のようになる。

(a)　『四阿含暮抄解』

「序」	鳩摩羅仏提執胡本。※本＝文㊂ 仏念・仏護為訳。 僧導・曇究・僧叡筆受。
(一)『出三』 巻二	鳩摩羅仏提出、仏提執胡本。 竺仏念・仏護為訳。 僧導・僧叡筆受。
(二)『法』 巻六	鳩摩羅仏提共竺仏念等訳。
(三)『三』 巻八	鳩摩羅仏提訳、仏提執梵本。 竺仏念・仏護等訳為秦文。 僧導・曇究・僧叡等筆受。

(b)　『鼻奈耶』

「序」	耶※舎出。仏提梵書。※舎＝捨㊀ 仏念為訳。 曇景筆受。
(一)『出三』	〔記載せず〕
(二)『法』 巻五	竺仏念訳。
(三)『三』 巻八	竺仏念。 曇景筆受。

(四)『彦』巻五	鳩摩羅仏提訳。	
(五)『内』巻三	鳩摩羅仏提訳、仏提執梵本。竺仏念・仏護等訳為秦文。僧導・曇究・僧叡等筆受。	
『内』巻七	鳩摩羅仏提訳。	
『内』巻九	鳩摩羅仏提訳。	
(六)『静』巻二	鳩磨(ママ)羅仏提訳。	
(七)『図』巻三	鳩摩羅仏提共仏念・仏護等訳。僧導・曇究・僧叡等筆受。	

(四)『彦』巻一	竺仏念訳。	
(五)『内』巻三	竺仏念。曇景筆受。	
『内』巻七	竺仏念・道安等訳。	
『内』巻九	竺仏念共道安等訳。	
(六)『静』巻一	竺仏念訳。	
(七)『図』巻三	竺仏念。	

(八)	『武』 巻十四	〔経名、巻数のみ記載〕
(九)	『開』 巻三	鳩摩羅仏提訳、仏提執梵本。仏念・仏護訳為秦文。僧導・僧叡・曇究筆受。
	『開』 巻十三	鳩摩羅什仏提等訳。（ママ）
	『開』 巻十七	鳩摩羅仏提訳。
	『開』 巻三十（重出）	鳩摩羅仏提等訳。
(十)	『貞』 巻五	鳩摩羅仏提訳、仏提執梵本。仏念・仏護訳為秦文。僧道・僧叡・曇究筆受。（ママ）

(八)	『武』 巻十	竺仏念等訳。
(九)	『開』 巻四	竺仏念。曇景筆受。
	『開』 巻十三	竺仏念訳。
	『開』 巻二十（重出）	竺仏念訳。
(十)	『貞』 巻六	竺仏念伝訳。曇景筆受。

『貞』巻二十三	鳩摩羅仏提等訳。
『貞』巻二十七	鳩摩羅仏提訳。

(c) 『阿毘曇八犍度論』

「序」	僧迦禘婆出。 仏念訳伝。 慧力・僧茂筆受。
(一)『出三』巻二	僧伽提婆所訳出。
(二)『法』巻五	僧伽提婆訳。

『貞』巻二十三	竺仏念訳。

(d) 『尊婆須蜜菩薩所集論』

「序」	僧伽跋澄出。 仏念訳伝。 跋澄・難提・※掃婆執胡本。 慧嵩筆受。 ※掃＝禘㊀
(一)『出三』巻二	僧伽跋澄齎胡本。 竺仏念訳出。
(二)『法』巻五	僧伽跋澄共竺仏念訳。

(三)『三』巻八	僧伽提婆。 竺仏念伝語※。※〔語〕—(三)(宮) 慧力・僧茂等筆受。
(四)『彦』巻一	僧伽提婆共竺仏念訳。
(五)『内』巻三	僧伽提婆。 仏念伝。 慧力・僧茂等筆受。
(六)『静』巻二	〔経名、巻数、紙数のみ記載〕
(七)『図』巻二	僧伽提婆訳。

(三)『三』巻八	僧伽跋澄。
(四)『彦』巻一	僧伽跋澄共竺仏念訳。
(五)『内』巻三	僧伽跋澄。
『内』巻七	僧伽跋澄共竺仏念訳。
『内』巻九	僧伽跋澄共竺仏念訳。
(六)『静』巻一	僧伽跋澄共仏念訳。
(七)『図』巻三	僧伽跋澄。

(八)『武』巻十	僧伽提婆共竺仏念訳。
(九)『開』巻三	僧伽提婆翻訳、出。
『開』巻十三	僧伽提婆共竺仏念訳。
『開』巻二十（重出）	僧伽提婆共竺仏念訳。
(十)『貞』巻五	僧伽提婆出。

(八)『武』巻十	僧伽跋澄共竺※仏念訳。 ※〔竺〕―㊀
(九)『開』巻三	僧伽跋澄共釈道安等訳。 跋澄・難提・提婆執本。 仏念訳伝。 慧嵩筆受。
『開』巻十三	僧伽跋澄等訳。
『開』巻二十（重出）	僧伽跋澄等訳。
(十)『貞』巻五	僧伽跋澄共道安等訳。 跋澄・難提・提婆執本。 仏念伝訳。 慧嵩筆受。

『貞』巻二十三	僧伽提婆共竺仏念訳。

(e)『僧伽羅刹所集経』

「序」	僧伽跋澄齎比経本、出。 仏念為訳。 慧嵩筆受。
(一)『出三』巻二	僧伽跋澄。 竺仏念訳出。
(二)『法』巻六	曇摩難提訳。
(三)『三』巻八	僧伽跋澄。

『貞』巻二十三	僧伽跋澄等訳。

(f)『増壱阿含経』

「序」	曇摩難提出。 仏念訳伝。 曇嵩筆受。
「後記」	曇摩難提口誦。 仏念為訳人。
(一)『出三』巻二	難提口誦胡本。 竺仏念訳出。
(二)『法』巻三	曇摩難提訳。

『三』巻八	曇摩難提。
(四)『彦』巻二	曇摩難提訳。
(五)『内』巻三	僧伽跋澄。
『内』巻三	曇摩難提。
『内』巻七	曇摩難提訳。
『内』巻九	曇摩難提訳。
(六)『静』巻二	曇摩難提訳

(三)『三』巻八	曇摩難提。 慧嵩・竺仏念等筆受。
(四)『彦』巻一	曇摩難提訳。
(五)『内』巻三	曇摩難提。 慧嵩・仏念筆受。
『内』巻七	曇摩難提訳。
『内』巻九	曇摩難提訳。

(七)『図』巻三	僧伽跋澄。
『図』巻三	曇摩難提。
(八)『武』巻七	僧伽跋澄訳。
『武』巻十	曇摩難提訳。
(九)『開』巻三	僧伽跋澄。仏念伝訳。慧嵩筆受。
『開』巻三	曇摩難提。

(六)『静』巻一	曇摩難提訳。
(七)『図』巻三	曇摩難提訳。竺仏念度語。慧嵩筆受。
(八)『武』巻八	曇摩難提訳。
(九)『開』巻三	曇摩難提出、訳。仏念伝語。慧嵩筆受。
『開』巻十五	曇摩難提訳。

『開』巻十三	僧伽跋澄等訳。
『開』巻十五	曇摩難提訳。
『開』巻二十（重出）	僧伽跋澄等訳。
(十)『貞』巻五	僧伽跋澄。仏念伝訳。慧嵩筆受。
『貞』巻五	曇摩難提。
『貞』巻二十五	曇摩難提訳。

(十)『貞』巻五	曇摩難提出、訳。仏念伝訳。曇嵩筆受。
『貞』巻二十五	曇摩難提訳。

右の表をざっと通観してみて、気づく点は、

㈠　道安の「序」では、誦出者と訳出者は明確に区別せられている。『出三』も、やや曖昧になっている（例えば、(c)『阿毘曇八犍度論』の場合）が、ほぼ「序」を踏襲し、誦出者と訳出者を区別している。

㈡　所が『法』に至ると、誦出者が前面に出て、訳者になっている。

ある場合には、「鳩摩羅仏提共竺仏念等訳」のように、「序」に見られる本当の訳出者は共訳者または協力者になり、ある場合には、「僧伽提婆訳」のように、本当の訳出者はまったく無視せられている。

『法』以後の経録類も、これを踏襲し、本当の訳出者は、共訳者か協力者にせられ、またはまったく無視せられている。

㈢　『三』、『内』巻三（歴代衆経伝訳所従録）、『開』巻三、四（総括群経録）、『貞』巻五、六（総集群経録）では、「序」の記述を取り入れているが、『内』巻七（歴代小乗蔵経翻本単重伝訳有無録）、『内』巻九（歴代衆経挙要転読録）、『開』巻十三（有訳有本録）、巻十五（欠本目録）、巻十七（別録中補闕拾遺録）、巻二十（重出、入蔵録）、『貞』巻二十三（有訳有本録）、巻二十五（別録中有訳無本録）、巻二十七（別録補闕拾遺録）などでは、「鳩摩羅仏提訳」というように誦出者を訳者として名前を出している。

以上、この表から様々な事が読み取れるが、いずれにしても、「序」や『出三蔵記集』では、明確に区別せられ、しかも対等な地位であった誦出者と訳出者は、『法経録』以後の経録類においては、目録では誦出者が訳者ということになっている。

これにはいろいろの理由があるのであろうが、次のような事は考えられないであろうか。

現存の経録類は、釈道安が訳経事業を行った時代（三七九―三八五）から、『出三蔵記集』では百年以上、『法経録』では二百年以上、『内典録』では三百年近く、時が経過してから作られていて、当然そこに道安時代と、梁や隋、さらに唐の時代とは、訳経の規模、訳経組織の整備、訳経に対する社会の評価など大きな変化があったと想像せられる。

また訳場での役割りや地位が変動していることが考えられる。

特に著しく変ったものとして、『法経録』以後の経録類が単なる誦出者をも訳者としている点であるが、これは道安時代にはなかった訳主という地位が確立したことによるのでなかろうか。

道安時代の印度西域の三蔵は、自分の暗記している仏典の誦出、または印度西域の諸言語で書かれた仏典の読誦などの役を受け持つ誦出者であったが、時代が下るにつれ、印度西域からより完全な原典が将来され、鳩摩羅什の如く、印度西域の三蔵で中国語をマスターして、自から漢文に訳出できる人が、訳経事業の中心となってくると、彼等印度西域の三蔵は、単なる仏典誦出者でなく、訳経事業の中心的存在としての訳主であり、まさに訳者ということになったのであろう。

所が問題は、『法経録』以後の経録類が、訳経事業に関して、このような時代による変化を考慮に入れず、自分の時代の訳経の観念で、前代の記録を見て、経録を整理してしまったことである。

例えば『四阿含暮抄解』について、『出三蔵記集』では、「西域沙門鳩摩羅仏提、於鄴寺出」と述べている所が

あり、この場合の「出」は誦出または読誦の意味であると思われるが、『三宝紀』、『内典録』、『開元録』、『貞元録』では、「西域三蔵沙門鳩摩羅仏提、秦言童覚、於鄴寺訳」となっていて、「出」が「訳」にかえられている。これは前代の記録を、後代の訳経の観念で読みかえてしまった一つの例である。

前章で対照してみた『高麗蔵』と『大正蔵』の二つの、我々に最も親しい『目録』にまで、道安時代の誦出者を訳者にするという誤りが伝承せられ、我々もそれを受け入れてきたのであるが、それは、以上のように経録類の考えに起因するものであろう。

註

① 『大正蔵』五五巻六四頁下。
② 『大正蔵』五五巻一〇頁中。
③ 『大正蔵』五五巻一四四頁中。
④ 『大正蔵』四九巻七五頁下。
⑤ 『大正蔵』五五巻一八〇頁中。
⑥ 『大正蔵』五五巻二五〇頁上―中。
⑦ 『大正蔵』五五巻三〇二頁中。
⑧ 『大正蔵』五五巻三一二頁中。
⑨ 『大正蔵』五五巻三二五頁下。
⑩ 『大正蔵』五五巻一九六頁中。
⑪ 『大正蔵』五五巻三五八頁上―中。
⑫ 『大正蔵』五五巻四七一頁中、四七二頁上。
⑬ 『大正蔵』五五巻五一〇頁下。
⑭ 『大正蔵』五五巻六二三頁上。
⑮ 『大正蔵』五五巻六六八頁中。
⑯ 『大正蔵』五五巻七二一頁下。
⑰ 『大正蔵』五五巻八〇七頁中。
⑱ 『大正蔵』五五巻九五六頁下―九五七頁上。
⑲ 『大正蔵』五五巻一〇〇八頁中。
⑳ 『大正蔵』五五巻一〇四五頁上。
㉑ 『大正蔵』二四巻八五一頁上。
㉒ 『大正蔵』五五巻一四〇頁上。
㉓ 『大正蔵』四九巻七七頁上―中。
㉔ 『大正蔵』五五巻一五五頁中。

㉕『大正蔵』五五巻二五二頁上。
㉖『大正蔵』五五巻三〇〇頁中。
㉗『大正蔵』五五巻三一〇頁中。
㉘『大正蔵』五五巻三二四頁上。
㉙『大正蔵』五五巻一八八頁上。
㉚『大正蔵』五五巻三五八頁中―下。
㉛『大正蔵』五五巻四三三頁中。
㉜『大正蔵』五五巻四七〇頁中。
㉝『大正蔵』五五巻五一二頁上。
㉞『大正蔵』五五巻六一九頁下。
㉟『大正蔵』五五巻七一九頁下。
㊱『大正蔵』五五巻八〇八頁下。
㊲『大正蔵』五五巻九五三頁上。
㊳『大正蔵』五五巻一〇四三頁中。
㊴『大正蔵』五五巻七二頁上―中。
㊵『大正蔵』五五巻一〇頁下。
㊶『大正蔵』五五巻一四二頁上。
㊷『大正蔵』四九巻七六頁上。
㊸『大正蔵』五五巻一五五頁下。
㊹『大正蔵』五五巻二五〇頁中―下。
㊺『大正蔵』五五巻三〇〇頁下。
㊻『大正蔵』五五巻三一一頁下。
㊼『大正蔵』五五巻一九五頁下。

㊽『大正蔵』五五巻三五六頁下。
㊾『大正蔵』五五巻四三四頁下―四三五頁上。
㊿『大正蔵』五五巻四七〇頁下。
(51)『大正蔵』五五巻五一一頁上―下。
(52)『大正蔵』五五巻六二〇頁上。
(53)『大正蔵』五五巻七二〇頁上。
(54)『大正蔵』五五巻八〇八頁上。
(55)『大正蔵』五五巻九五三頁中。
(56)『大正蔵』五五巻一〇四三頁中。
(57)『大正蔵』五五巻七一頁下―七二頁上。
(58)『大正蔵』五五巻一〇頁中。
(59)『大正蔵』五五巻一四二頁中。
(60)『大正蔵』四九巻七六頁上。
(61)『大正蔵』五五巻一五五頁下。
(62)『大正蔵』五五巻二五〇頁中。
(63)『大正蔵』五五巻三〇一頁上。
(64)『大正蔵』五五巻三一二頁上。
(65)『大正蔵』五五巻三二五頁上。
(66)『大正蔵』五五巻一八八頁下。
(67)『大正蔵』五五巻三五八頁中。
(68)『大正蔵』五五巻四三四頁下。
(69)『大正蔵』五五巻四七〇頁下。
(70)『大正蔵』五五巻五一〇頁下―五一一頁上。

71 『大正蔵』五五巻六二一頁上。
72 『大正蔵』五五巻七二〇頁中。
73 『大正蔵』五五巻八〇七頁下。
74 『大正蔵』五五巻九五四頁下。
75 『大正蔵』五五巻一〇四四頁上。
76 『大正蔵』五五巻七一頁中。
77 『大正蔵』五五巻一〇頁中。
78 『大正蔵』五五巻一四四頁上。
79 『大正蔵』四九巻七六頁上。
80 『大正蔵』四九巻七五頁下。
81 『大正蔵』五五巻一六一頁中。
82 『大正蔵』五五巻二五〇頁中。
83 『大正蔵』五五巻二五〇頁中。
84 『大正蔵』五五巻三〇一頁下。
85 『大正蔵』五五巻三一二頁中。
86 『大正蔵』五五巻三二五頁中。
87 『大正蔵』五五巻一九六頁上。
88 『大正蔵』五五巻三五八頁中。
89 『大正蔵』五五巻三五八頁中。
90 『大正蔵』五五巻四一二頁上。
91 『大正蔵』五五巻四三六頁下。
92 『大正蔵』五五巻四七一頁下、四七二頁上。
93 『大正蔵』五五巻五一〇頁下―五一一頁上。

94 『大正蔵』五五巻五一一頁下。
95 『大正蔵』五五巻六二二頁中。
96 『大正蔵』五五巻六四九頁下。
97 『大正蔵』五五巻七二一頁上。
98 『大正蔵』五五巻八〇七頁下。
99 『大正蔵』五五巻八〇八頁上―中。
100 『大正蔵』五五巻九五五頁下。
101 『大正蔵』五五巻九八六頁上。
102 『大正蔵』五五巻一〇四四頁中。
103 『大正蔵』五五巻六四頁中。
104 『大正蔵』五五巻七一頁中―下。
105 『大正蔵』五五巻一〇頁中。
106 『大正蔵』五五巻一二七頁下。
107 『大正蔵』四九巻七五頁下。
108 『大正蔵』五五巻一五四頁上。
109 『大正蔵』五五巻二五〇頁中。
110 『大正蔵』五五巻二九六頁下。
111 『大正蔵』五五巻三〇七頁下。
112 『大正蔵』五五巻三二二頁上。
113 『大正蔵』五五巻一八六頁中。
114 『大正蔵』五五巻三五八頁中。
115 『大正蔵』五五巻四二二頁中。
116 『大正蔵』五五巻四六八頁中。

(117) 『大正蔵』五五巻五一一頁中―下。
(118) 『大正蔵』五五巻六三七頁下。
(119) 『大正巻』五五巻八〇八頁上―中。
(120) 『大正蔵』五五巻九七二頁下。

三、訳経史研究についての提案

以上見てきた如く、『法経録』以後の経録類は、道安時代の仏典訳出者について、仏典の誦出者を訳者として伝承している。

これは経録類の作られた時代の訳経の観念で、前代の記録を整理したことによるのであって、何の根拠もない。それが今日の我々にまで伝承せられ、例えば『増壱阿含経』の訳出者について、曇摩難提か、僧伽提婆かということでのみ論議せられ、かって本当の訳出者である竺仏念はまともに取り上げられたことがないのである。

しかし少くとも、道安時代の訳経史研究には、誦出者の問題も勿論重要であるが、漢文に訳出せられた訳文を中心にみていく場合には、本当の訳出者こそ問題とならなければならないはずである。

従来の訳経史研究は、この点が十分配慮せられていない。従って極論すれば、本当の訳出者について、配慮せられていない漢訳仏典訳経史研究は、その名に値いしないということになるが、これは従来の訳経史研究が、経録類偏重の研究であって、仏典そのものの訳語訳文という内的資料を用いなかったことにも起因するのである。

故に、これからの研究においては、経序、経録類の外的資料と訳語訳文という内的資料を十分照し合わせることによって、本当の訳出者を見出す努力が必要である。

そこで本稿を終るに当って、道安時代の訳経史研究について、一つの提案を試みておきたい。

実際の訳出者を問題とする場合、従来の経録類での「訳者」では、訳主を意味していて、的はずれである。

従って従来の誦出者―訳主―を含めた訳者ということばと区別して、誦出者に対し、実際に仏典を漢文に訳出した人を訳出者と名づけ、従来の経録類では失われてしまったその地位を回復し、中国訳経史研究に、新たな視点を与えたいと思う。

（七二・三・一〇）

（本学専任講師・中国仏教史）